

寺子屋バト

※題字／森川芳聲

もくじ

2 巻頭言『寺子屋だより第二〇〇号発行に寄せて』……山口 秀範

3 教育雑感⑤……………白濱 裕

4 偉人レポート……………高見澤 玉江

6 橋を架ける―海を越える友情の物語……………占部 賢志
(新連載)

8 母の物語……………水崎 之子

9 鳥飼八幡宮―ゆかりの名士たち
(第二回) 中野 正剛・緒方 竹虎……山内 圭司

10 TERA KOYAふおとればーと

11 あちこちde寺子屋のご案内

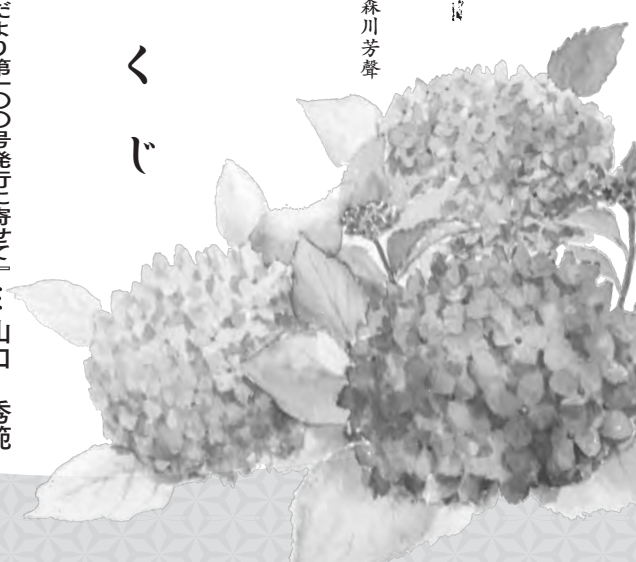
12 碑のころ(5) 編集余録

碑のころ

元寇防塁碑

福岡市早良区西新七丁目

※詳しい解説は12頁に掲載しています



寺子屋だより第一〇〇号発行に寄せて

代表世話役 山口 秀範

ご愛読いただく「寺子屋だより」の記念すべき一〇〇号をお届けします。創刊は平成十七年六月で隔月発行とし、その後一時は毎月や季刊もありと変遷しつつ二百十六カ月がかりで一〇〇号に到達した次第です。この間関わってくれた社員・スタッフや、ご理解ご支援を寄せてくださった皆様方のお陰と感謝申し上げます。

今から二十六年前に前職を辞し、学生時代から私を育ててくれた国民文化研究会（現在は公益社団法人）の事務局長を務めながら寺子屋開業を模索しました。併行して福岡の地域FMラジオ番組「ラジオde寺子屋」を五年間毎週発信しつつ想を練って、平成十七年二月に株式会社寺子屋モデル設立に到りました。その活動をタイムリーにお知らせすべく「寺子屋だより」を発刊して「寺子屋応援団」を募ったところ、望外の反響（個人・法人会員合わせて三五〇口）を頂戴し、今も変わらず支えてくださいます。

バックナンバーを読み返すと、様々な事業や出会った人々が鮮明に甦ります。我ながら果敢にチャレンジし続けたと懐かしい気もしますが、最大の挑戦はこれからの「志明館」開校にあるわけで感慨に浸る暇はありません。とは言え、教育再生の一助にと志す寺子屋モデルの足跡は現代日本の教育課題と表裏をなしており、本号から数回に亘り巻頭言を振り返ります。

「江戸の学び展」を訪ねて（第6号・平成18年4月）

当社のルーツを訪ねるような展覧会に、起業早々に巡り合えたのは幸運でした。中でも『実語教』の存在を知ったことと寺子屋の教育が「個別最適」を先取りしていた事実を認識したことは大きな収穫でした。

江戸東京博物館の企画展「江戸の学び・教育爆発の時代」を訪ねました。豊富な資料特に図版が多く、当時

の様子を生き生きと再現した楽しい催しでした。

「往来物」と呼ばれる教科書の中でも「実語教」は遠く平安時代から使われており、冒頭には「山高きが故に貴からず、樹あるを以て貴しとす。人肥えたるが故に貴からず、智あるを以て貴しとす」とあり、外見よりも内面を磨く心構えを説いています。

更にお金はこの世まで持つて行けないが「智は是万代の財、命終れば即随て行く」「智」（教養・見識）ある立派な人との評価は末代まで語り継がれると教えています。「実語教」を子供の時に学ぶべきだった大人の、現代に何と多いことでしょう。

現代の英雄（第12号・平成19年4月）

警察学校での寄せ書きに「誠実、誠心、誠意」と記し、「皆さんが安心して暮らせるように」が口癖だった宮本邦彦さんは、踏切に進入した女性を助けようとして職に殉じたのです。「夫の性格を考え、これが天命だと受け入れようと努力しています。お父さんの行為を誇りに思います」という奥様のことも、広く共感を呼ぶものでした。

普段から住民に親しまれ善き家庭人でもあった宮本さんは、今回の事件がなければ、寄せ書きに記したモットー通り地味で堅実な一生を送ったに違いありません。ところが、「一旦緩急あれば義勇公に奉じ」という、戦前の日本人が大切にしていた「教育勅語」の教えながら、実に男らしい生き方の手本を示してくれました。

「昔の偉人たちは本心に立派だった。でも今の日本にはお手本にするような人はいない」という言葉をよく耳にした矢先に起こったのが、東上線ときわ台駅での事故でした。

ご遺族はじめ多くの関係者にインタビューして『伏してぞ止まん ぼく、宮本警部です』を上梓し、宮本さんの一周忌に墓前に捧げることが出来ました。そして絵本の感想文コンクールに応募した子供たちの感想などもまとめて『殉職・宮本警部が伝えたかったこと』を出版しました。「現代の偉人宮本警部」は多くの子供たち向けに今も語り続けられています。

「うりはみクラブ開校」（第13号・同上6月）

瓜食めば 子ども思はゆ 栗食めば まして偲はゆ：山上憶良の子を思ふ歌に因んだ「うりはみクラブ」へと、毎日三人が通って来ます。自主学習の時間に集まらず大幅遅刻したりもたまにはありますが、自分の居る場所を取り戻した喜びは周囲にまで伝わってきます。担任の寺子屋講師が、中二・中三の生徒たちにしっかりと向き合い寄り添って信頼関係を築きつつあります。「君の持っている素晴らしい力を存分に発揮出来る場所があるよ」と呼びかけ、やがて学校に戻りたくなるパワーを身につけさせようと日々取り組んでいます。

一期生の学校復帰の弁です。

Aさん「うりはみでは、茶道や華道などを初めて経験でき、学校では習わない「偉人伝」は毎回来しい時間でした。本当は中学校に通いたかったけれど、なかなか踏み出せず……。けれど普通高校に進学できることになって本当によかった、華々しい女子高生活にします。」

Bさん「うりはみに来て一年十カ月。先生に『あなたのお母さんは、あなたのために必死なんだから、あなたも頑張らなくてはい』と言われ、そこから少しずつ頑張って、毎日通えるようになりました。うりはみの子たちと兄妹のように仲良くなれ、一泊キャンプの思い出もきつと一生忘れません！有難うございました。」

（追記）六月十七日開校の「養成講座」募集中です。あなたも偉人伝を語りませんか。